

## 301. 安土町大中の湖南遺跡の調査について

### 1. 位置と環境

琵琶湖の周辺には、内湖と呼ばれる湖が40箇所あまり存在していた。これらの内湖は、水深が浅いことなどから、農業振興策により次々に開拓され、現在は10箇所ほどが残されている。

「西の湖」は、現在残された内湖の中では最大のもので、湖面面積は2.85km<sup>2</sup>、平均水深1.5mを測る。

しかし、この「西の湖」は、もともと独立した内湖ではなく、「中の湖」と呼ばれたより大きな内湖の一部であった。「中の湖」は、「大中の湖」・「小中の湖」・「伊庭内湖」・「安土内湖」・「西の湖」とを合わせたもので、湖面面積15.4km<sup>2</sup>を測る現在の「諏訪湖」を上回る規模を持つ湖であった。これらの内湖は、昭和21年から約20年間にわたり行われた、干拓事業により、現在のように「西の湖」を残すのみとなった。



図1 調査地位置図 (S' = 1/5,000)

大中の湖南遺跡は、「大中の湖」と「小中の湖」との間に形成された浜堤上に位置している。

この浜堤の北側部分は、昭和41年に滋賀県教育委員会によって調査されている。その結果、弥生時代の水田遺構と大量の農工具が出土したことで有名になった。

また、そのほかにも周辺から、縄文時代から鎌倉時代にかけての遺物が大量に出土しているため、長期間にわたり、内湖のほとりに集落が営まれていたことが推定され、この浜堤の重要性をうかがい知ることができる。奈良・平安時代の遺物としては、大量の緑釉陶器・104枚の隆平永宝など、一般集落で出土しないような官営的な性格を考えさせるものも出土している。

今回の調査地点は、蒲生郡安土町下豊浦地先に所在し、この浜堤の南側の旧「小中の湖」側にあたる。

### 2. 発掘調査の結果

発掘調査は、県営農業農村整備事業に伴い、平成12年8月から平成13年3月までと、引き続き4月から5月まで調査を行った。調査面積は、1,100m<sup>2</sup>である。

調査の結果、木材と石材で構築された水辺の施設が3基検出された。これらの遺構は、それぞれ近接したところから検出されており、何度も作り替えられ、補修されながら使用されていたことがうかがえた。

また、遺構が築かれた順番は、第3遺構・第1遺構・第2遺構の順である。構築された時期については、出土した遺物から、第1遺構が7世紀・第2遺構が8世紀・第3遺構はそれ以前と考えられる。

出土遺物は、土師器甕・須恵器坏などの土器類の他に、土錘・浮子などの漁労具、下駄・齋串・剣形代などの祭祀具、和同開珎などがある。

#### (第1遺構)

全長約37m・幅2.2mで、南北方向に長く延び、南側先端部が東へ屈曲して取束している。石敷検出面の標高は、82.5m~83mである。北側先端部は、石敷面に第2遺構の一部の矢板列が打ち込まれていることから、第2遺構よりも1段階古いものであることがわかった。

中央部は、南側に側板を7枚横長に配置し、横板で固定している。その構築方法は、ほぼ同時期に造られた、横板井籠組よこいたせいろくみの井戸枠と同様に、板の両端に近い部分の上下面に切欠を入れ、組み合わせる方法をとっており、1段から3段に組んであったと考えられる。



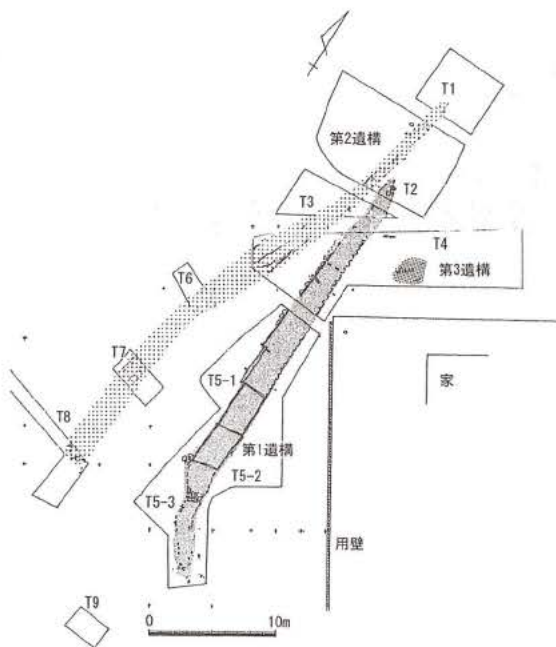


図2 遺構平面図

側板・横板ともに、針葉樹の割板材である。各材の寸法は、縦板が幅45cm・長さ4.5m・厚さ3cm~4.5cm、横板が幅21cm~24cm・長さ2.7m・厚さ4.5cmを測る。また、縦板・横板の切欠部分の寸法は、幅4.5cm~9cm・深さ4.5cm~6cmを測る。縦板を配置した際の、板と板の重ね部の長さは、25cm~40cmであった。

そして、その固定した枠の内部に直径30cm大の石材を充填している。側板列の中央部から南側の部分にかけて、その石材の下に20cm~30cmの厚さで灰白色の砂が充填されているのが確認できた。

さらに、側板の両側には石材を充填した後、直径15cmの広葉樹の丸太杭を打ち込んで補強している。丸太杭の打ち込み方には規則性はない。

内湖に近い南側先端部では、幅15cm~20cm・長さ60cm~70cm・厚さ6cmの針葉樹の矢板を隙間なく1列に打ち込み、さらにその先は、針葉樹の矢板や直径10cm~20cmの広葉樹の丸太杭を間隔をあけてまばらに打ち込んでいる。また、この南側先端部には、石材は充填されていない。

#### (第2遺構)

全長約42m・幅約1mで、南北方向に延び、その両端は、東にやや湾曲し収束している。石敷検出面の標高は、82.3m~83.3mで、水深の深い内湖側に向かって緩やかに傾斜している。

中央部は、幅10cm~25cm・厚さ6cm~10cmの針葉樹の矢板を一列に隙間なく打ち込んで側板としている。

西側と東側の側板列間は、約1mである。そして、



調査地の全景 (南より)

その内部に直径30cm大の石材を充填している。矢板の長さは、中央部に打ち込まれていたものが1.8m、北側端部に近い部分に打ち込まれていたものが60cm~80cmであった。

T4の西側からT7にかけて、矢板列の東側に矢板を打ち込み補強している。特にT4では、さらにその打ち込んだ根元に幅5cm~10cmの細い針葉樹の板材を数本組み合わせ横たえ、より頑丈に補強している。

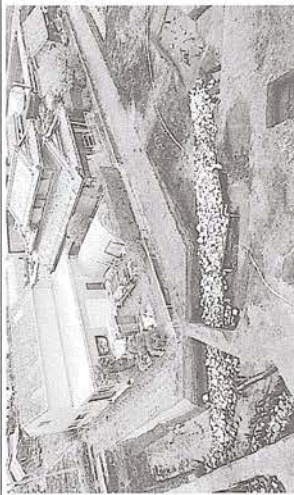
両端部は、矢板杭のみをまばらに打ち込み収束しており、第1遺構のように丸太杭は使用されていない。

また、縦方向に打ち込まれた矢板列は石敷よりも70cm~90cm高くなっていたが、これは地震による液状化現象により板材だけが高く浮きあがったものと考えられる。

北側の先端に近い部分に打ち込まれていた、矢板の年輪年代測定を行った結果、西暦599年の測定値がでてくる。西暦599年の値はこの木が伐採された時期がこの年より新しいことを示している。

#### (第3遺構)

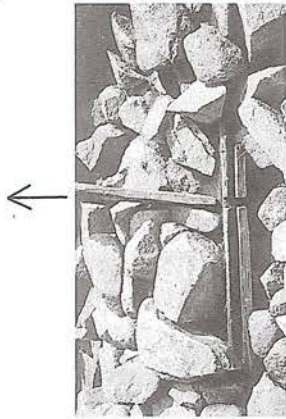
調査区の東端で、幅15cm~20cmのまばらに並んだ矢板列や、直径15cmの広葉樹の丸太杭等が検出されたが、その構造等は不明である。すでに破壊されたか、第1・第2遺構の構築時に杭や矢板や石材といった構築材が転用された結果と考えられる。



第1遺構（西より）



第1遺構（北より）



板材の組合わせ部



図3 第1遺構平面図見通し図





図4 明治28年測量の大中の湖周辺図

### 3. まとめ

今回発見された遺構は、「大中の湖南遺跡」の「小中の湖」側にあり、浜堤から内湖へ向けて延びることがわかった。第1遺構・第2遺構ともに、長さ40m前後の規模で、矢板・横板などを用いて囲い、その中に石材を入れて、泥質地への沈み込みを防いでいる。両遺構とも先端が東方向に屈曲して収束すること、第1遺構の南側先端部が石敷遺構から丸太構造に変化すること、「大中の湖南遺跡」が琵琶湖水運の拠点に位置することなどから考えると、遺構の性格は、内湖の縁辺部に設けられた港湾的な施設であると推測される。水運の重要性が示されながら、港湾に関わる施設の発見例は少なく、内湖に構築された古代の港湾施設だとすると、初めての発見例であり、全国的にも希少例であると言える。また、斎串や形代などの祭祀遺物が多く出土していることから、周辺では湖上交通の安全祈願などの祭りも行われていたと考えられる。

側板や横材に長大な大型材を使用していること、第1遺構では各板材が精巧に組み合わせられていること、大量の石材が山から運び込まれたものであることなどから考えると、この施設を構築するには多くの労力が使われたことがわかる。

なお、発見された遺構は、地権者をはじめ地元および関係各機関のご理解により、現地保存されている。

(財)滋賀県文化財保護協会 坂梨 咲子

### 【参考文献】

- ・大沼 芳幸 『琵琶湖－内湖（西の湖）と八幡堀』  
（『別冊歴史読本41 日本歴史の原風』  
新人物往来社） 2000年
- ・水野 正好 『大中の湖南遺跡調査概要』  
（滋賀県教育委員会） 1967年
- ・林 博通 『古代近江の遺跡』  
（サンライズ出版） 1998年